

一八八四年二月二日(土)

ドツキネーシヨル
南神村の寺院で、ラカール、ラトウ、校長、マヒマーたちと共に

聖ラーマクリシユナと腕の怪我——三昧、および宇宙の母との対話

タクールは、ドツキネーシヨル南神村寺院のあの部屋にいらつしやる。時間は午後三時頃、土曜日。キリスト暦一八八四年二月二日(ベンガル暦一二九〇年マーグ二十日)、白分六日目。

先日、タクールは半三昧状態でジャウ樹台ツツの方へ歩いて行かれたとき、鉄柵のところで転倒なさつた。あいにく誰もお伴をしていなかったのである。それで、左腕の骨が脱臼してひどい怪我になつた。校長は知らせをうけて、カルカッタから副木、当て布、包帯などを持って来た。

ラカール、マヒマーチャラン、ハズラーたちが部屋にいた。校長はタクールの御足みそに額かぶずいてごあいさつ申し上げた。

聖ラーマクリシユナ「おやまア！ お前は病氣でもしていたのかい？ もうよくなったのかい？」
校長「はい、よくなりました」

聖ラーマクリシユナ「(マヒマーに)——さて、さて、私は道具であなたが使い手てなのに、どうい

うわけで、こんなことになったんだろう？」

タクールは小寝台の上に坐っていらつしやる。マヒマーチャランは自分の聖地参詣の話をして、タクールはそれを聞いていらつしやる。十二年前に参詣に行つたのである。

マヒマーチャラン「カーシーのシクロールの或る庭園で一人の修行僧に会いました。

この庭に住んでいるが、持ち主は誰だか知らないと云っていました。私に、『勤めに出ているのですか？』と聞きますので、『ちがう』と言いましたら、『では、托鉢修行の方ですか？』と言いました。

ナルマダー河の岸边で会つた一人の修行僧は、心の内でガーヤトリーを称えておられまして、見ると体の毛が逆立っているのです。一段と声高くオームやガーヤトリーを唱えると、周囲あたりに坐つて聞いている人たちも身ぶるいをして毛を逆立てるのですよ」

タクールは子供と同じだ——お腹がお空きになつたとみえて、校長にこうおつしやる——「ね、何か持つてきたかい？」

そして、ラカールを見て三昧に入つてしまわれた。

三昧が解けている。平常に戻るためにタクールはおつしやる——「わたしはジリビを食べる」「わたしは水を飲むんだ！」

タクールは子供と同じだ。宇宙の大実母マに向かつて、泣きながら言つておられる——「ブラフママイー！（大実母の一名、梵ブッダよりなるもの意）どうしてわたしをこんなにした？ わたしの腕はすごく痛いんだよ。（ラカールやマヒマーに向かつて）——よくなるかしら？」そばにいる信者たちは幼い子に

言つてきかせるような言い方で返事をする。——「すぐ良くなりますとも！」

聖ラーマクリシュナ(ラカールに)——お前は、わたしの身のまわりの世話をするために此処にいるのに——でも、お前のせいじゃないよ。だつて、お前がついてきていたとしても、どうせお前は鉄柵のところまでは来なかつただらうしね(訳註)」

〔聖ラーマクリシュナと子供の態度——ブラフマン智には百万遍もお辞儀する〕

タクルルは再び前三昧状態になられ、その中で言つておられる——

「オーム、オーム、オーム。マー、わたしが何を言おうとしてるかわかる？ マー、わたしにブラフマン智をくれて無意識にしないでおくれ。マー、わたしにブラフマン智をくれないでおくれ。私は子供なんだから！ 怖がったりビクビクしたり——わたしには母さんが要いるんだ——ブラフマン智に、わたしは百万遍もお辞儀する。アレは、あげなけりやならない人たちにあげな。アーナンダマイー！アーナンダマイー！」(アーナンダマイー＝歡喜の母)

タクルルは大声で「アーナンダマイー！アーナンダマイー！」と叫んでお泣きになり、次の詩句を口ずさまれた。

私は悲しい 情けない——

あなたという母親がついていて

しかもハッキリ目覚めているのに
わが家に盗人が忍びこむとは

一八八二年十月二十七日に全訳あり

タクールは再び大実母とお話をなさる——

「わたしは何か間違ったことでもしたのかなあ、マー？ わたしがいったい、何をしてる？ あんたがみんなしてるんじゃないか、マー！ わたしは道具、あんたが使い手だ！（ラカールに向かつて）——ハハハハハ、お前も転ばないようにしろよ！ 腹立ちまぎれに、バカなことをするんじゃないよ！」（訳註——ラカールがついていたのに何をしていんだと、皆が言うことを想定した言葉）

タクールはまた大実母におっしゃる——「マー、わたしはケガをしたから泣いているのかい？ いや——

私は悲しい 情けない——

あなたという母親がついていて

しかもハッキリ目覚めているのに

わが家に盗人が忍びこむとは——

（訳註1）ラカールは後に、ラー ज्या（王様）と呼ばれたように、王様のような性質だったので、侍従のように急いで駆けつけるようなことはしなかっただろう、という暗示を含んだ言葉。

どんなふうにして神を呼ぶか——夢中になれ

子供のようにに笑ったりしゃべったりしていらつしやるタクール——ちようど、子供が大病になつても、ときどき笑つたり遊んだり歩きまわつたりしてゐるようにに。マヒマーたち信者を相手に話をしていらつしやる。

聖ラーマクリシユナ「サツチダーナンダをつかまなけりやどうにもならんよ、旦那！」

ヴイヴエーカ ヴァイラレキヤ
識別と離欲に代わるような品物はないね。

世間の人たちの情熱は、ホンのわずかの間しか続かない。熱けたフライパンに水が一滴落ちて乾く間くらいのものさ。花を見て、アハー！ 何とすばらしい神の御業よ！ これだけ。

無我夢中にならなきやだめだ。息子が財産の分け前を欲しがつてバタバタしていれば、父親と母親は相談して予定より早く分けてやるよ。一生懸命に頼めば、あの御方が聞いてくれないはずがないんだ。

あの御方が産んでくださったのだから、あの御方のところには我々の相続財産がちゃんとあるんだよ。あの御方は自分の生みの父親、生みの母親だ。無理やりねだればいいんだよ。姿を見せてくれ！ さもなきや喉をかき切つてやる！ ぐつて」

タクールはどのようにして大実母を呼んだらいいか教えてくださった。——「わたしはマーを、こんなふうにに呼んだものだ——」マー、アーナンダマイー！ 姿を見せてくれないのかア！

それから時にはこんなふうにに——「オー、低いものたちの主よ、世界の主よ。わたしの智識は貧しく、

修行も、信仰も足りない。わたしは何も知らない。どうぞ慈悲を垂れて、姿を見せておくれ——」

タクールは大そう憐れっぽい声に節までつけて、あの御方の呼び方を教えてくださる。その哀れな声を聞いて、信者たちの胸は溶けて流れそうになるのだった。マヒマーの目には涙があふれてきた。

彼の方を見て、タクールは再び口ずさまれた——

「心を込めて呼んでごらん、シヤーマはきっと来てくれる……」

シヴァプールからの信者と総代理権委任——マドウ医師

シヴァプールからの信者たちがやって来た。遠くの地方から苦勞してやってきた彼等に対して、タクール、聖ラーマクリシユナは黙っているわけにはいかない。いくつかの大事な話を彼等に語られる。

聖ラーマクリシユナ「（シヴァプールの信者たちに向かつて）神だけが真実在で、ほかは皆、ほかないものだよ。主人とその庭だ。神とその御威光だ。人は庭ばかり見ているが、主人に会いたがるのは何人だ？」

信者「では、どんな方法で？」

聖ラーマクリシユナ「真実と虚仮を見分けること。あの御方は真実、ほかは皆、その場かぎりのほかないもの。——これをいつも見分けること。一心不乱になって神を求めること」

信者「はい。でも、その閑がないのです」

聖ラーマクリシユナ「時間のある人たちは瞑想したり、お祈りしたりするがいい。どうしてもそれ

が出来ない人たちは、一日二回、真剣に神様にゴラナイムご挨拶しろ。あの御方は内なる導き手アンタルヤミシなんだよ。みんながどんな境遇だか、ちゃんとわかっていなさるよ！ たくさん仕事をしていなけりゃならんこともね。お前たちは神に呼びかける時間がないなら、あの御方に代理権を委任しろ。だが、あの御方をつかまなければ——あの御方に会わなけりゃどうにもならんよ」

一人の信者「はい。あなた様にお目にかかることは、神様に会ったのと同じでございます」

聖ラーマクリシユナ「そんなこと、二度と言うな。波はガンジス河のものだが、ガンジス河がどうして波のものであるものか。私は重要な人物だとか、私はたれそれであるとか、こういうウスボレをすっかりなくさないかぎり、神を覚えることはできないんだよ。私シのかたまりを信仰の水で溶かして、地面と同じにしてならしてしまえ」

〔なぜ世間に？ 苦楽を卒業してから一心不乱になって神をつかむ〕

信者「神はなぜ、私共をこの世にお置きになったのですか？」

聖ラーマクリシユナ「創造のためにお置きになったのさ。あの御方の意思だよ。あの御方の現象アイトだよ。あの御方は女と金で人間を惑わしておきなさる」

信者「何故、惑わしておかれるのでしょうか？ 何故、それが神のご意志なのでしょう？」

聖ラーマクリシユナ「一度神の喜びを知ったならば、誰も世俗の生活を送らなくなってしまう。それじゃ、創造の仕事が進行しないからさ。」

米蔵こめくらには大きな大きな袋に米を入れて置いてある。ネズミがその袋に気付かないようにと、番人はフクラシ米（ムルキシロフ蜜シロフを絡めたボン菓子）を皿にいれておく。いかにも美味しそうなので、ネズミは一晚中それをモグモグかじっているんだ。本物の米を見つけようともしない。

だが、まア考えてもごらん。一シアの米は十四倍のフクラシ米になるんだよ。女と金の快楽より、神の喜びの方がどれだけ勝まさっていることか。あの御方の美しさを思えば、ラムバーやティロットマー（共に天上の舞姫）の美しさも火葬場の灰ぐらいの感じだね」

信者「なぜ私共は、神を覚おぼりたいという強い焦燥を感じないのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「この世の苦楽を味わい尽くすまでは、神を求める気にはなれない。女と金の経験の、自分に与えられた持ち分をすっかり卒業するまでは、宇宙の大実母の方へ心が向かないのだ。子供が夢中で遊んでいるうちは母親を探さないが、遊びに飽きてくると、『母ちゃんのところへ行く』と言い出す。フリダイの子供が鳩と遊んでいた。鳩に向かって、『おいで、チッ、チッ』なんて呼んでいた！ さんざ鳩と遊んだあげく泣き出した。そこへよその人が来て、『母さんのところへ連れていってあげるよ、さアおいで』と言うと、すぐにその人の肩に乗っかって行ってしまった。

永遠ニテイヤ・シツダの完成者は世間に入る必要はない。彼等の苦楽の経験は生まれたときから終わっている」

〔マドゥ医師の到着とマドゥスーダナ——神の御名の大切さ〕

五時になった。医者のマドゥウ先生が来た。タクルの腕に副木を当てて包帯をするのである。タクル

ルは子供のよう(訳註、マドゥスーダナ―クリシュナの一名、マドゥ鬼を滅した者の意)に笑つていらつしやる。そして、「この世とあの世のマドゥスーダナだね」とおっしゃる。

マドゥ先生「はっはっはっは。名前負けして息が切れそうです」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハ、どうしてだい？ 名前は大切なものだ。あの御方とあの御方の名前とは離れちゃいないよ。サティヤバーマー(クリシュナの妻の一人)は、天秤計りの片方に黄金と寶石をのせてクリシュナの目方を測ろうとしたが、どうしても測れなかった。ところがルクミニー(クリシュナの妻の一人)は、トウルシーの葉にクリシュナの名前を書いて天秤皿にのせたら、ちょうどクリシュナの目方と釣り合ったよ！」

包帯の準備がととのつた。床に寢床がつくられた。タクールは笑いながらその寢床に横になられた。そして節をつけながらこんなことを言つていらつしやる。——「ラーダーが最期の時を迎えようとしていた。プリンデは言う——『まだ何が起ころか、分かりませんよ』」

信者たちが周囲を取り巻いた。タクールはまたお歌いになる——「牛飼^ゴい乙^ビ女^メたちは皆、池のほとりに集まつた！」タクールは愉快そうにお笑いになり、信者たちも笑つた。副木と包帯の手当てがすむと、タクールはおっしゃつた。

「わたしはカルカッタのお医者さんたちをあんまり信用していませんよ。シャンブーがわけの分からぬことを言い出したとき、医者(サルヴァディカリー医師)は、『何でもない、ちよつと薬に酔つただけだ』と言つた。そのあとすぐ、シャンブーは死んだよ！」〔原典註——シャンブー・マリククの死は一八七七年のこと〕

マヒマーチャランへの教訓

夕暮れになって各神殿の献灯アイトラテイは終わった。まもなくカルカッタからアダルがやってきて、額ぬかずいて師にごあいさつ申し上げた。部屋にはマヒマーチャラン、ラカール、校長がいる。ハズラーも時おり入ってくる。

アダル「お変わりもなくお過しでいらつしやいますか？」

聖ラーマクリシュナ「(愛情をこめて)これを見てくれ！腕うでがこんなど、アハハハハハ。お変わりもなくどころじゃないさ！」

アダルは信者たちと共に床に坐った。タクールは彼におつしやる。

「お前、腕のここんとを少しさすってくれないか！」

アダルは小ベッドの北端に坐ってタクールの尊いお足をさする。タクールはマヒマーチャランを相手にまたお話しになる。

〔根本的なことは無条件の信仰——自己の本性を知ること〕

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーに向かつて)無条件アヘトウキ・バクテイの信仰！お前、もしこの修行ができたらたいたしたものだよ。

解脱、名譽、金、病氣治し、どれも求めない。ただ、あなただけが欲しい！——こういうのを無条件アヘトウキ

の信仰バクテイというんだ。

旦那のところへ大勢の人が行く——いろんな頼みごとがあつて。けれども、誰かが何も頼まないで、ただ旦那が好きだから旦那に会いに来るとしたら、旦那だってその人が好きになる。

ブラフラーダたちはこの無条件の信仰——神を純粹無私な気持ちで愛していたよ」

マヒマーチャランは沈黙していた。タクールは再び話される——

「そうだ、お前の気分にあつたような話をしようかね。(マヒマーに向かつて)ヴェーダーンタでは、自己の本性を知らなければならぬことになっている。だが、これは我がを捨てなけりやできないことだ。我がは一本の棒のようなもので——水に浮かんで、水が二つに分かれて見える。私はは私は、お前ははお前とと区別している。

三昧に入ると、この我はなくなつてブラフマンがはつきりと現れる」

信者たちの誰彼はこう思ったかも知れない——「タクールはブラフマン智をもつていらつしやるのだらうか? もしそうなら、どうしてわたし、わたしとおつしやるのだらう?」

タクールはまた話をなさる——「私はマヒマー(チャラン)・チャクラバルティーで学識豊かな男だ、というような私はは捨てなけりやいけないよ。明知ウイデイヤの私ははあつてもいいがね。シャンカラアーチャリヤ大教師は人々を導くために、明知ウイデイヤの私をを留めていらつしやつた。

女の人に対してうんと用心深くしないと、ブラフマン智は得られないよ。だから、世間においては難しいのさ。どんなに氣をつけていたつて、煤部屋すすに住んでいれば体に煤がくつつく。若い女といつしよ

にいと、情欲を超越したはずの人にも色情がわいてくる。

けれども、智識の道を行く人の場合は、ときどき妻と交わつてもかまわないよ。糞や小便をするのと同じ気持ちで精液を排泄するわけだから——たまにはね。あまり気にしなくてもいい。

たまに、モンダ（ミルク菓子）を食べるようなものさ（マヒマー笑う）。世俗の生活をしてる者にとつては、それほど害にもならない」（訳註、モンダ——大量の牛乳ミルクを使って作る特別なお菓子でふだんは口にしない）

〔サンニヤーシンのきびしい戒律とタクール、聖ラーマクリシュナ〕

「しかし出家遊行者サンニヤーシンの場合は、それはとんでもないことだ。女の人の絵を見てさえ害になる。出家にとつて女の人は——吐いたツバをまた飲みこむようなものだ。

出家は、女の人といつしよに坐つたり話したりしてはいけない。それがどんなに信心深い女であつても——。情欲の制御ができていても話をしてはいけない。

サンニヤーシン
出家は女と金の両方を捨てるのだから、女の絵も見ないようにするのと同じに、金にも——金銭ゼニカネに手をふれないようにすることだ。銭かねを身のそばに置いておくなんて言語道断だよ！ ゼニ勘定、金についての気づかいやウヌボレ、他人への腹立ち——こういう悪いものが、金を身のそばに置いておくことでみんなやってくる。太陽が出ていても、雲がかかるとかくれてしまう。

だからこそ、マルワリの人がフリダイのところところに金を置いておこうとしたときに、わたしは言ったのさ——『それもいけない。金が身近にあると雲がわいてくるから』と。

出家僧サンニヤシの戒律はどうしてこんなにきびしいのか、わかるかい？ その出家自身のためでもあることは勿論だが——またそれは、人々を正しく導くためでもあるんだよ。その僧はもう無欲無執着になつて——性欲も克服しているかもしれないが、それでも人々の教訓のために、女と金を放す下るんだ。

出家僧の十六アナ(百パーセントの意)の放テヤク下を見て、人は勇気が出る！ 自分も女と金を捨すてようとなつた！

出家僧がお手本を見せなけりや、誰タレが努力する気になるだろう！」

〔ジャナカ王たちは神を体得してから世間で暮らした——聖賢リシと豚肉〕

「あの御方をつかんでから世間で暮らす。牛乳からバターをとつて、そのバターを水に浮かすようにね。ジャナカ王はブラフマン智を獲て、それから世間で暮らしていた。

ジャナカは二刀流だね。智識ジニヤーナの刀と行為カルマの刀と——。出家は行為カルマを捨てる。だから一刀流だ——智慧の刀のね。ジャナカ王のような智者兼社会人は、樹の下の方の果実みも上の方の果実も両方とも食べることが出来る。修行者として奉仕されることも、修行者を接待することも、みんな出来る。わたしは大実母マに言ったものさ。『マー、わたしは味もソツケもない聖者サドクにはなりたくない』と。

ブラフマン智を得たら、食物のこともいろいろ考えなくなる。ブラフマン智を求めて修行した聖賢リシたちは、目的を達したあとは何でも食べたよ、豚肉までも」

〔四つの期間——ヨーガの原理と聖ラーマクリシュナ〕

（マヒマーに向かつて）——「大ざっぱに分けると二種類のヨーガがある。行為のヨーガと心のヨーガ——行為を通じてするヨーガと心を通じてのヨーガだ。」

学習期、家住期、穩退期、出家修行期——このうちで、はじめの三つは行為をしなげりやならない。サンニヤーシンになると杖と水筒と鉢だけを持っていて、ニティヤ・カルマ（朝夕の勤行など）で義務となっている祭式もするが、こだわりはない。やつてるなんて意識さえない。いつも神のことだけ想っている。何人かのサンニヤーシンはニティヤ・カルマをいくらかすることもあるが——それは人びとを教えるためだ。家住期にある人たちや、ほかの期間の人たちが無私の仕事をするのができたなら、その人たちはその行為を通じてヨーガ（神との合一）ができる。

大覚者の境界では——シユカデーヴァたちのような——仕事はみんな脱落する。祭祀、称名、先祖への献水式、朝夕の勤行、こういう行為のすべてが必要なくなる。この境界では、ただ心のヨーガだけだ。外に向けた行為も時々喜んでもある——人びとを導くためにね。だが、心の中ではいつも神を想っている」

マヒマーチャランの聖典朗読をきいてタクールの入三昧

話しているうちに夜も八時になった。タクール、聖ラーマクリシュナはマヒマーチャランに聖典のなかから何か讃詞を朗読するようにとおっしゃった。マヒマーチャランは本をとりあげて、ウッタ

ラ・ギーターの最初のところにあるブラフマンに関する一節をタクルにお聞かせした。

完全、梵、^{エーテル}空を超え、純粹

無始、無終、超越、心、知性

つづいて、第三章七節を読み上げる――

*二度生まれたるものは

神を火のなかに拝し

ムニはそれをわが心臓に瞑想し

智識に制限ある人は

それを像のなかに見

平等覚を得たるヨーギーらは

それを至る処に見る

*ヒンドゥー教徒の上位三カースト、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャのカーストの者は、聖糸授与のとき第二の誕生をするので――。

即ち、バラモンたち(クシャトリア、ヴァイシャも)にとっては神は火に、ムニたちは神は^{むね}自心に、知性の少弱な人間たちにとっては神は像に、そして平等覚を得た^{マハ}ヨーギーたちにとっては神は到る処に在る、という意味だ。

平等覚を得たるヨーギーら——この句が発音されるや否や、タクールは突如として坐から離れて立ち上がり三昧に入られた。——腕には副木と包帯を当てたままの姿で。信者たちは驚嘆の眼差しで、この平等覚を得た大ヨーギーの姿を注視している。

かなりの間この状態のまま立っておられてから平常に戻り、再び座をお組みになった。マヒマーチャランに、「今度はあのハリ信仰の節を読むように——」とおっしゃった。マヒマーは、ンチャラト・パ
ンチャラトから数節を詠んだ——

愛をもって神を拝せば

苦行は全く無用なり

愛をもって神を拝さざれば

贖罪の行は全く空し

神、もし内にも外にも実在すならば

苦行は全く無用なり

神、もし内にも外にも実在さぬとなら

贖罪の行は全く空し

ああブラフマン わが子よ

贖罪の苦行を止めて

天なる智慧の大海

シヤンカラ(シヴァ)のもとに急ぎ

彼より神の愛

清く清浄なる愛を得よ

それは汝らをこの世に縛る足枷を

打ちくたくであらう

聖ラーマクリシュナ「アハー！ アハー！」

〔個体と宇宙——汝こそチダーナンダ——我ナに非ハず、我ナに非ハず〕

詩の数節をお聞きになると、タクトールはまた前三昧状態になられた。でも、三昧に入らぬように気の抑制に努められた。今度は、ヤティーパンチャカカを読み上げている——

われはそれ、大実母なる生みの母なり

動くもの、動かざるものの住む宇宙の幻影は魔法の如く、わが内部うちにあり

わが心の遊戯なる宇宙は、わが内に光り輝く

われはそれ、意識の権化、宇宙の自我

唯一の实在^{サット}、智識^{チット}、永遠^{アーナンダ}の歓喜なり

「われはそれ、意識の権化——この句をお聞きになると、タクルは笑いながらおっしゃった——
「小宇宙(個体)にあるものは、全宇宙にもあるんだよ」
今度はニルヴァーナをうたった六連の四行詩——

オーム、われは心に非ず、知性に非ず

自我^{アハムカール}に非ず、意識^{チット}に非ず

眼、耳、鼻、舌の感覚にも非ず

地、水、火、風、空にも非ず

純智^{チターナンダ}、至福^{シヴァ}のシヴァなり

チターナンダ——チット(純智)、アーナンダ
(至福)

マヒマーチャランが、我、チターナンダのシヴァなり、シヴァなりとくりかえすたびに、タクルは笑いながらこうおっしゃるのだ——

「我^ナに非^{ハム}ず！ 我^ナに非^{ハム}ず！——汝こそ、汝こそチターナンダ」

マヒマーチャランは、ジーヴァナムクテイ・ギターターから数節を詠み、六チャクラ説言を詠んだ。そして彼自身が、カーシーで一人のヨーギーがヨーガの状態のまま死ぬのを見た、という話をした。

それから、ブーチャリー・ムドラーとケーチャリー・ムドラーの説明を始めた。また、シャーンバ
ヴィー・ヴィデイヤーの話もした。シャーンバヴィーはさすらう。何のあてもなく。

〔修行者が詠むラーマ・ギーターをタクルは以前に聞いたこと〕

マヒマー「ラーマ・ギーターに、それはそれはいい詞ことばがございますよ」

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハツハ。お前、ラーマ・ギーター、ラーマ・ギーター（訳註2）と言うね。じゃ
お前は、全くのヴェーダーンタ信者なんだね！ ここでも修行者たちがよく詠よんでいたよ」
マヒマーチャランは神のひびき（オーム）についてのところを朗読した。

——それは絶え間ない油の流れのように、それは鳴りひびく鐘かねの余韻のように！

それから三昧の特徴についてのところ——

三昧に達した人は

上部と、下部と、中間がアートマンに満ち

彼はすべてが

アートマンで満たされているのを見る

アダルとマヒマー・チャランは、間もなく師を拜してお暇いとまを告げた。

(訳註2) ラーマ・ギター——ラーマが弟のラクシユマナに自らの教えを語ったものが『ラーマ・ギター』で、そこにはヴェーダーンタの深遠な教えがすべて凝縮されている。